

## 編集後記

消化器外科学会の設立の目的は消化器外科の進歩、普及を計ることとなっている。しかし社会、経済の変化は学会の役割にまで微妙に影響を与えているように思われる。学術集会でも医療問題や卒前、卒後の教育に関する主題が多く取り上げられるようになったし、専門医の審査基準も知識偏重から臨床実績を重視するようになった。また、教育集会も標準的治療の為のガイドラインを示すことを主な目標とした。これらは学会が国民の健康や福祉により直接的に関わっていく姿勢を打ち出したと理解される。学会は学問の進歩に寄与するばかりでなく、その成果を国民に還るための優れた医師を養成することにまで責任をもちだしたようだ。このような変化は、医療現場での医療安全管理、EBM、clinical path の評価が定着した以外に臨床や産業にも直結するような遺伝子研究等の基礎研究が飛躍的に進歩したことも拍車をかけているようだ。

これまでの医科学や臨床医学は、まず実験ベンチや患者の観察から出発し一般的な法則を見出す帰納的アプローチが主体であったが、21世紀には遺伝子のデータベースなどを駆使して、経験に頼らず論理の規則に従って必然的な結論を導き出す演繹的アプローチが重要となる時代が到来するといわれている。患者、個々の特性に応じた医療が展開されるようになると一般の人たちは期待している。

21世紀になって初めて基礎と臨床研究が真に融合するような新時代が迫っている。教室員にも臨床研究の手法も十分にこのことを留意しなければならないと講釈するのであるが、教室員も理解はするが戸惑いを隠せない。医学、医療分野の革命も少しずつだが、続いているのであろうか？ (嶋田 紘)